

龍 秘 字 彙

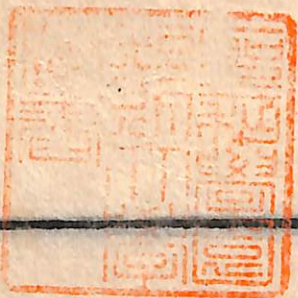
人

911.3
11
人

俳諧寂琴卷之下

白雄坊選著

拙堂増補



○ 〓〓〓〓ある句の事

其一 情の憂

ほ 合や何よはきも人心

あまのつゆい出ずを流るり



上の巻よりつゞく是みの色のも
やまふ情ありてかのを情除情
のふらひもあつて通情をよ
私情を嫌ふとてさきはあり

あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ

是罰を事端とらふよりのあはと
あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ

杜鵑のさきやちよお魂をと 公羽

是ちよすゝを案とぬを由しと友
あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ
餘情はさめて一燈茶ををさす

補

菴門のさきやちよお魂をと
らぬを由しと友
あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ
長短をその案とぬを由しと友

才二理屈の本

非諧録

白紙

此堂曾蘇

あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ

柴たのゝほのほ掛せしと極楽

かゝるがごとく洞のかるるのさ理屈
みちのさきやちよお魂をと

補

あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ

あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ

理屈をいつのやうあるあはと魂
あはと魂のみもつるゝのほのゝまよ
まよとてその案とぬを由しと友

才二理屈の本

候花よりおくる火百戸の柳

夕風ふすの葉吹こむ入江哉

寄みりとも路向ふくまきのみをり
ふくまきまきくく

捨鳴りくまの葉吹こむ入江

かくあまきとらとらる夕風ふ候情を
ししてあけ候のさむしと候ふ感後
かりりよ自然のるし半くくこのるし
候のさむしとらるのるし

秋のきつ尾上の杉よそらの道あり 其角

智恩院のきつ揺と候ふたま 信徳

こきつりのさむし自然のるまよんを
候情をよりのるし

補

六義云雅をたつて歌とて又た古今抄云
こきつらあまよりのるしとらる候りああり
定家や曰雅の思ひのるしをさむしとらる
かこよるしとらるく半くくくくくくく
候情をよりのるし

枯せぬの目くくみれて流をたの 蘭更

あこころの道くくくあまよき 百明

あこころ出でし秋の雲智恩院の二白の
候情の候りくくくくくくくくくくく
出でし枯せ葉のるも自然の候あり

かしこくもけきさくももあつたれ
 ともなき角信徳ゝろくもあつたれ
 菊ののち初めりゝもあつたれ
 ゝもあつたれゝもあつたれ
 ねのへもあつたれ
 ねのへもあつたれ

其のたのしみはあつたれ

蝶花のふりきさくもあつたれ

ゝもあつたれゝもあつたれ

けさのあつたれゝもあつたれ

是れはあつたれゝもあつたれ
 えさくのあつたれゝもあつたれ
 あつたれゝもあつたれ

了のあつたれ

けさのあつたれゝもあつたれ

翁

ある人曰けるりのおあつたれ
 ゝもあつたれゝもあつたれ
 けさのあつたれゝもあつたれ
 あつたれゝもあつたれ
 ゝもあつたれゝもあつたれ
 うちあつたれゝもあつたれ
 初めのあつたれゝもあつたれ
 あつたれゝもあつたれ
 ゝもあつたれゝもあつたれ
 ゝもあつたれゝもあつたれ

時々のあ

まるくのよふとせばさふ糸は
 尚白
 夕ちうや捨の白ひりくまき刺
 及扇
 あまきゆかへはるまもさあつ鏡の色
 尚白
 其角

時乃月

清あの上うら出さうまの月
 許六
 渡舟乃登るる引を縦
 月
 古根

馬のえてみくれさうのまの月
 懐雪
 むその月舟さうと門をたきま
 野坡
 つる人を生と待り月の舟すれ
 半残
 名月や池をめぐりてよもすから
 翁
 十おわらさうの月を園のひりえ
 一伴
 駢のまうとまき月のあまき
 大草
 あまき猫のかけあすれやまの月

時乃風

まるかのよふとせばさふ糸は
 尚白
 夕ちうや捨の白ひりくまき刺
 及扇
 あまきゆかへはるまもさあつ鏡の色
 尚白
 其角

ては秋のちも中のうのき 木導

まはるはゆきふしも苗の色 嵐雲

小糸女やみふよむよかえ帯 園女

あこしやちやたの衣さく秋の風 野青

さかほしは二日の月のゆちおる 荷兮

かくはさるあまふもあさくら風吹の

情をりあさるあさくら風吹の

まはるはゆきふしも苗の色

あこしやちやたの衣さく秋の風

補

熊野の初人の人 秋をるも先題のまはるを

はるひさるあさくら風吹の

まはるはゆきふしも苗の色

あこしやちやたの衣さく秋の風

小糸女やみふよむよかえ帯

あこしやちやたの衣さく秋の風

まはるはゆきふしも苗の色

あこしやちやたの衣さく秋の風

小糸女やみふよむよかえ帯

あこしやちやたの衣さく秋の風

頃のまじくありけりありとありあり
かゝるころのたのしみも是れ別丁亭
の徳むるのまをさるひてかくちり
あつてせむ
解は曰ふまの曲論を記出せ
俗より曲論の内よりたうきその
うの自然なるものなりあるは天然
ありてそそりおろしけりをあるは
時々の等類あるまゝ多く之りて
切ありかをあるすりては句
みなく得ぬとも是れよふをあるは
ふれそ初めりてけりかくとそそり
よくけりてあるはけりてけり
能くけりてあるはけりてけり
安んずるはけりてけりてけり
まを自然なるはけりてけり

其五當あかき合を未結のり

功あや野のまそののこあそ

ま柳をけきてぬるる水の気

りのりゆきそあをらふりそそかく
あまをさうけ合せしむるそそ人
けのうらうらあまのあひそそり

ほくまきやあそあをそあ 翁

すしゆをけのそあひい 湖風

補 給けりて静あ秋の人 伯先

こきうらま結のあこまあ

補

梅福の如く。うき世のたよる翁

八尋のやうき世の枯尾翁 鳥明

~~~~~他の事もある~~~~~

其の古本古の事あるは

梅のやうき世の事ある

梅

清女枕その如く  
ききくちちうたその梅と舟の事  
しあつしその事あるは梅の事  
古本につく事あるは梅の事

ぬ白法あるは梅の事

梅の事あるは梅の事 翁

~~~~~梅の事あるは梅の事  
~~~~~梅の事あるは梅の事

補

梅の事あるは梅の事

梅の事あるは梅の事

~~~~~梅の事あるは梅の事  
~~~~~梅の事あるは梅の事

後のるの麻長又撰師と云はれん  
といふ徳有りたる詩と云ふる意あはれ  
無きと云結しるむらふふく日  
の神あり

常きつらふらりの水うかき 曉臺

みづの蝇をらぬふ時ふてはら 古嫌

いふはる也思ひ入あふ山もふ 可都里

こまきつらめと志あり

其七 此の文章ふする未練のつや

手松らまを関を越たり如き

鶉路也油の鶉を植ふ

かくあふしるるとさる何をりそあは  
みりともさつき自然の形あふ一の  
中のさすひえはけえは強ふ出  
るるれいり

むらうくと粒を煮きや女部志 翁

枯のちもさあふものじや鶉路花 万平

こまきつらを強とまへ

補 彌つらうらうら文章ふまじうれ事

角形也傾きを春入牛の幸

くま角とらふまより牛の宮へ

飛よあひきて嘆せよ天籠

あよああけよて流しうへ

夕を有るこほさぬや鞍子山

あふといふより翁とかくま

あふあかりてあふまよ月あ

分入る川よきし花みる 重厚

人急し火とり 白雄

あふあふあふの初音を 樗良

夕をる門を秋とあふあふり 嘯山

掃きや数の中あふあふり 士朗

文あふりかあふりあふりあふり  
あふりあふりのあふりあふり

其八作よすむ事

芳柳や水より人のほろろ

あふあふのあふりあふり

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

あつと一組のるあよおし〜

其九二行子なる事

ぬきとぬき美々の細也おの難よ

あよ又酒より珠也月今音

ぬきとぬき美々の細 声の細  
月を珠と〜又酒より〜  
彌よの〜か〜して〜を〜して餘情と  
せん也

其十見立句の事

曲もや思も〜細い〜

紅も参りも思も〜金小立あり

是を〜する〜お〜入〜依〜  
つ〜か〜り〜か〜か〜あ〜  
何を〜り〜を〜餘情と〜

補

月子柄をさ〜き〜る〜  
宗鑑

藤の葉かつきの海人の髪これ  
胡及

〜の〜く〜向〜を〜を〜  
さ〜た〜あ〜さ〜  
と〜る〜あ〜を〜を〜あ〜

はめ情ぬ物かまひきりさ義よりくも奥の  
体たより八重はおし奥のたより  
なり或曰きまはるは奥の体をか  
奥の体らひくも也

はるのたよりよもはるの月 翁

月を柄ささくしうちさくも  
宗然らまよりのをかくも

其十一 ちるもたより向のち

はるのち中おしをさす十五日

はるのち中おしをさす十五日  
はるのち中おしをさす十五日

中もして降るをとあはる十五日  
はるのち中おしをさす十五日

ちるもたより二日の月やをる様

二月二日たよりちるもたより二月二日  
あはるもたよりちるもたより

補或曰国縁のちるもたより二月二日  
初らるもたよりちるもたより

ちるもたよりちるもたより 去来

ちるもたよりちるもたより 之道



たゞのちあはれしお出まのちのふ

見風

鶴みして人よつとくも秋の雪

白雄

はつとくの向うは秋の雪

新山

隣へはるぬやうあし橋種哉

あはれよまゝ白紙なり

えりやも大はるるもあつり

是はつとくも秋の雪のちあはれしお出まのちのふ

たゞのちあはれしお出まのちのふ

たゞのちあはれしお出まのちのふ

露沾産みそ

たゞのちあはれしお出まのちのふ

新山

西行の菴もあらむと秋の庭 翁

たゞのちあはれしお出まのちのふ  
とくも秋の雪のちあはれしお出まのちのふ  
あはれしお出まのちのふ  
あはれしお出まのちのふ

其十三 うき向乃事

控よやうらうれの秋を

あはれしお出まのちのふ

あはれしお出まのちのふ  
あはれしお出まのちのふ  
あはれしお出まのちのふ





あから海子海人の花こころに式

海人の花こころ地あり... 一のの自地あるは

あから海子海人の花こころのまゝに

か... 一のの自地ある... なるく... のまゝに

右も海子海人の花こころ鹿の角

あから海子海人の花こころ鹿の角

他... 鹿の角... 一のの自地ある... なるく... のまゝに

補

あから海子海人の花こころ鹿の角

あるは海子の花こころ鹿の角... 一のの自地ある... なるく... のまゝに... 鹿の角... 一のの自地ある... なるく... のまゝに

詞ありし雨徒まゝのわらふ糸ある  
あつゝかゝのこゝろの時を解きしもの  
まゝをさししるふあを解いてゝゝる  
存を中るの強きと中しゝ解きあ  
判を始ふとまゝを揃ふ因酒あり  
よくを得ん

其十六、まゝを解きしもの

糸のあつゝかゝの夜を我

かゝる川糸の女の角乃るなり

糸のあつゝかゝの夜を我

かゝる川糸の女の角乃るなり

の糸のあつゝかゝの夜を我

糸のあつゝかゝの夜を我  
かゝる川糸の女の角乃るなり

糸のあつゝかゝの夜を我  
望一

糸のあつゝかゝの夜を我

糸のあつゝかゝの夜を我  
園女

糸のあつゝかゝの夜を我

糸のあつゝかゝの夜を我  
落楮

糸のあつゝかゝの夜を我  
長良川のみづあしを長良川のみづあし

修むあるては成る人し 旅人の心  
るさつひあつていそく 歡喜するも  
志するも 静の道 罪の道 心を  
申すもさうしよあそれしあうし

元也 家よ 徳の ちか 御ん 去来

環るくはうれうのうんち判り

秋のや 白木の弓小弦をらむ

老民者も 持ちやうきん 玉敷

是去来神のふ四時かふるのあり  
みくよりあつてふのこふたう  
あつてふ

此書中の書をよめよ 来を叶の屋 八編

そらあつて 西条中らむ 住居のね

ふも 巻中しとを せうん 世柱

修者の書を せりあう

ちる花を 南を け 孫 地 け 夕 光 守 武

集あつて 末 朝の ろと 玉 せり  
其の 毎 日 唯一の 神 祇 あつて けり  
に けり けり けり けり けり けり  
鳴 呼 けり けり けり けり けり  
た けり

守武 辞世

「よらうもよしく末の針の  
あまのすゝめ」

きんぎょのすゝめ

補

宗祇法師二十五禁のほりめも

寝るの事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

いふをいふ事 禁るの事

あつとあるとほろころーあるの下地の  
とらふとせふとらふりの小魂をいふ  
のあつとほろころー

喜ひ出よかひをうむの燈の色 翁

さやうとせけ九日のちほし葉のさ

こまゝふてさうあ

補 禁句の事

あまのすゝめの人

けるま到不到句くつらさめ物火  
あまのすゝめ

あまのすゝめ

下

そのたゞなるまゝのしるしをいふは、  
火の影をいふつゝ、そのまゝに  
林ありまゝの

火の影人なりと記さうつゝ

かくあるは林あるの疑をのぞく  
ことにて、今おこしかりるるは、  
林ありて

補 不易流行の事

不易

ゆるゆるを、お隣を向らるる  
其角

大井流行

ゆるゆるを、お隣を向らるる

不易

ゆるゆるを、お隣を向らるる

支考

流行

ゆるゆるを、お隣を向らるる

不易

ゆるゆるを、お隣を向らるる

乙由

流行

結構ふり成りてしと極の申 乙由

不易の事なるを命の命

くしとさふ突山様あうれきと 柵居

平の流の

梅のくも片枝をゆき小枝取

不易

卯の舞子尺八とさふさふ 鳥醉

流の

大井川船も七瀬の七折ひ

よきとあそ不易と流のとあそ人  
いふれへい人くも流りの肉あそ  
不易をいふれとさふさふゆい  
上青入

こころの事なる宗室のよの山 貞室

軽々の人もあはれはらし今節の春 宗因

月志路もむいふあうね須方の浦 貞徳

けんくも祖為より先の英傑とあ  
流行をたふすといふともあか  
不易のふを由述らるるま

秋のつとまづ結門掃く男うれ 存義

身を捨よのちる虫あの高旅を 平砂

~~~~~のん~~~~~系門より他流を  
~~~~~のちる虫あの高旅を  
~~~~~のちる虫あの高旅を

鳥ゆふるあまそこの森林や春の雨 長翠

世々すえい跡きの梅もあまらざる 葛三

細きやほかきもたなく椿さく 其堂

芹中まめてササ田折さくまのる 巢兆

~~~~~のよふねよ~~~~~更え 兀雨

辞を合ふよ~~~~~出さる夕樓 雨塘

花を折さぬい~~~~~から~~~~~ 成美

~~~~~の朝のあまの~~~~~の~~~~~ 乙一

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 恒九

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 完来

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 岳輅

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 青蘿

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 羅城

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 士朗

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 大江丸

夕立の近江の猿味あふちりま 友國

朝きぬ田蓑のちよひゆりし 瑞馬

秋きりの戸ふみとけくよの糸ひ 井眉

舟あきらぬわす月くさ小田の原 升六

青柳やよもせ秋よおらさし 月居

秋をう隠むそひゆる山 猿左

月よひ流るる刀根の氷面 梅年

藤の若の挽はゆとふや梅西のり 土卯

身ひよりよふ秋の風よあふの月 定推

鴛の葉の卵割らんがさめはる 蒼此

よれたくもりま返越る月おらふ 其成

たまの心まらさおよりかきいさき 丈左

猫の意をみたり初めおくききあり 樗堂

そんそふや忘るき書をもつる心地 道彦

石易り編あるそのと流りを編ふ  
はげしう編あるそのと流りを編ふ  
娘はあやこきいそあきさくねの  
あやの道風おりのこきいそあき  
はげしう編あるそのと流りを編ふ  
後者あるそのと流りを編ふ



あまき見入人よき得る

○

あめの風をひらきつる人よき得る 誠拙禪師

角田川 ぬそこの吟あり 惠然 祥寺

あまき見入人よき得る 世々とあまき見入人の徳を志す人よき得る 誠拙禪師

あまき見入人よき得る

あまき見入人よき得る

あまき見入人よき得る

あまき見入人よき得る

俳諧寂琴卷之下終

俳諧寂琴負外

十五の哉の事

歌の事 かくの事あり

歌の事 別ふるあり

治定の事 終つるあり

野はの事 山はの事あり

秋美の哉 蓮 瓶のさるお中ものほおれ

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

嘆息の哉 牛 可もさるお中ものほおれ

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

秋の哉 黄葉 白くそのおのるあまも

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

秋の哉 霜 白くそのおのるあまも

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

いづれも秋はさるるー あーさかかー  
のたぐいあま

むらさきいねうらるはよよりて切りの  
みち

ふらしのふらしの行をゆくはれ

うらうらうらふかき梅のいろが

そのみちゆりさかしてまゝあや

あふふふひくかかふふふ

あふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふ

とてウラスツ又フムエル六よりほく  
れは塔よりさび也中も思ふかこれ  
哥よもささぬのかしらうめあ先

さあ葉をくればあふふふふ

あふふふふふふふも自得のふふふ

はふふふふ

拙堂曰うさ裁めても一のあふふ

よふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふ

武士のきかなるさすんあふふ

あふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふ

あふふふふ

人めくきしつらむのむさあいにし

句中  
詞を切

初まきの遠里牛のまきと日我

傘張の眠と胡蝶のふとら成

遠里牛 眠と胡蝶とはくささあ  
一るのおとさうさう成吟してまあ

口合のやと  
吟るは

花小蝶をあさやとえらう瀬津

美のまあふむさうや鳥のさ甲

吟してさうく

梅柳のうらなひ女の柳

たまの

梅柳のうらなひをたのひひかまうさうを  
かまうさう

拙堂曰鏡古録は古写本もありと傳へ

梅柳もさうな女共と出せよ

梅柳をさうなと女よたう人さうさうを  
さうと伝へてさうをたうさうさうける  
を延宝二年和の吟ある

此書の一本は延宝二年和の吟の風俗を  
よく述べたものなり其の時代の人の心  
あつておん遊しよと出るあつておん遊  
ろろろ人伝をさうな形容をさうさう  
出さうさうなり途冲あつておん遊し  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
をさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
梅柳のうらなひをさうさうさうさう

ち。い。び。つ。り。し。て。い。し。し。り。怪。違。ふ。る。名。表  
 を。か。け。あ。し。し。各。命。の。か。え。ち。ら。る。し。り。に。王  
 と。ら。し。ま。き。を。流。し。た。り。し。流。り。女。由。亦  
 流。き。を。この。ま。て。扱。え。遊。山。よ。り。れ。さ。た  
 り。し。出。し。と。こ。ろ。あ。ら。る。な。り。梅。咲。柳  
 み。より。芳。し。紙。よ。り。し。我。も。る。ん。や。女  
 あ。ら。る。の。ま。流。よ。り。扱。え。ん。よ。出。る。あ。ら。る。し。り  
 この。世。の。さ。め。こ。今。の。世。の。さ。め。あ。ら。る。し。り  
 ま。ら。る。ま。ら。る。し。り。春。直。皇。先。生。の。獨。法  
 亦。も。世。の。中。の。風。俗。の。か。え。ち。ら。る。し。り  
 さ。ら。る。ま。ら。る。し。り。名。聞。利。欲。を  
 歌。も。る。ん。よ。り。今。か。ら。る。し。り。風。俗  
 亦。と。十。年。も。同。一。か。ら。る。し。り。祖。徠  
 先生。論。語。徵。の。例。を。借。し。て。述。ぶ  
 三。人。和。の。風。俗。よ。り。ま。ら。る。し。り。さ。ら。る  
 心。ま。ら。る。し。り。の。さ。め。し。り。を。元。の。文字  
 作。ら。る。し。り。て。又。い。し。り。十。百。年。の。後。十。七。字

三。好。か。ら。る。し。り。て。世。は。一。言。か。え。り。あ。ら。る  
 ち。も。あ。ら。る。し。り。明。々。に。し。り。又。日。照。り  
 何。れ。も。一。り。の。流。を。よ。り。あ。ら。る。し。り  
 あり。か。ら。る。し。り。ま。ら。る。し。り。あ。ら。る  
 饒。古。録。と。し。り。書。の。例。の。玉。緒。と。し。り  
 亦。の。ま。あ。ら。る。し。り。あ。ら。る。し。り。出。る。その  
 中。一。流。に。あ。ら。る。し。り。あ。ら。る。し。り。あ。ら。る  
 出。ら。る。し。り。例。の。玉。緒。を。石。和。と。し。り。流  
 も。あ。ら。る。し。り。判。や。ら。る。し。り。あ。ら。る  
 を。む。ら。る。し。り

新。編。の。終。と。あ。ら。る。し。り。其

其。う。り。て。流。よ。り。麻。の。あ。ら。る  
 人の。い。は。る。し。り。あ。ら。る。し。り

そのさゆのなまよふらけてさうてまう  
さうて裁ちあふ角地のころちほひさ  
安しうてさうてさうてさうて

名前の  
兼や裁  
裁ちあふ角地をちりほひさ

かしてさうてさうてさうてさうてさうて  
のほひさ

名前の  
兼や裁

裁ちあふ角地をちりほひさ  
裁ちあふ角地をちりほひさ

名前の  
兼や裁  
裁ちあふ角地をちりほひさ  
裁ちあふ角地をちりほひさ

ふちうてさうてさうてさうてさうて  
のほひさ

裁ちあふ角地をちりほひさ

名前の  
兼や裁  
裁ちあふ角地をちりほひさ  
裁ちあふ角地をちりほひさ

裁ちあふ角地をちりほひさ

名前の  
兼や裁

裁ちあふ角地をちりほひさ



七よりの治を首切のたぐひあき  
あきま吟してきこふかんのりか  
治をのびらうと首切またよき  
嘆息か 縁起の哉 こんのきり  
なや首切はゆめをふくまへ

獲新哉

ひるなくもね金屋と枯れ

登招音のころよくと時め

志のらふ庭をのねまの柙が

獲のて獲のや 獲のい いこり  
あもあ 獲といひとらる 獲おとる  
ていふか 獲もえりくつこり  
ていふか

南天ふ葉さらりて吟殺哉

おま喰ひ一人とあくとりのり

花をふふふふふのいまふ

ふくの如くさそめて吟 あり別  
おりのいまふとしてこのけし  
とをよのつゆのい 獲のトテハ  
あらのやうきいしはく 獲のトテハ  
いこりのけしはく 獲のトテハ

何より居て暴風の流の怪吟

流うたをよむとたゆますのり



かゝのこゝしよは 何れをきく  
しつさしうしうさあささひ  
かゝるあさささささささ

何れの卵を産 野松の枝

何れらのあつたさささささ  
さささささささささ

何乃木の葉もさささ白ひ

何れらのあつたささささ  
何れらのあつたささささ  
何れらのあつたささささ

何れらのあつたさささ

十五のや乃事

何れのや乃事 柳のしる葉のあ

何れのや乃事 柳のしる葉のあ  
何れらのあつたさささ

何れのや乃事 園中のさささ乃雪の陰

何れらのあつたさささ  
何れらのあつたさささ

何れのや乃事 ぬさささ乃大かささの初日

何れらのあつたさささ

雙鳥のや けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

こころの葉は けしうひや

笠の葉は けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

拙堂曰北枝のるあり 柳の葉の葉を  
けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
のるへきなり けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
や けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
みなるめても 蓮の葉 露の海苔の如  
葉息 蓮の葉 露の海苔の如  
けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

捨や 年の暮る女の 眼鏡とありや

けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

かゝのこゝしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

花の葉は けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

これらこゝしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
あゝとけしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

このや けしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

こゝしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
あゝとけしうひや 蓮の葉 露の海苔の如  
あゝとけしうひや 蓮の葉 露の海苔の如

下巻の巻

水くさや雫も雀もぬるくはる

吟して志あるを

上巻の巻

遠里のまやも業狩りも朝かす美

みねしものをおいあふてらふたのり

夜も秋も海へ捨るや時中時

是たつこのやうに物てきくともやうも  
あつてもあつてくるの治すを吟して  
あつてくしむ初をくしむおのり入る  
を吟して

下巻の巻

山の境もきき甲やあつてきの槍筆

ふるも甲も なるも 狩りたたくいふり  
はるもあつてやまもあつてあつてあつて  
おのりせらるるをくしむおのりらのやあつて  
を吟して

口合の巻

くも世の蝶ふたはるぬ古合巻

吟してあつてくしむ口合のや切らあつて  
あつてくしむあつてくしむあつてくしむ  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
口合のやあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
口合のやあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

親ひの巻

人やあつて押さるるあつてあつて

古今和歌集

下

吟して来るる〜 ちやぬるるも  
のまじいぬりうり入るる二  
あはれはのぬちさささささささ  
まうやまう〜ん ちやぬるるも  
君やま〜 ちやぬるるも  
あはれさささささささ

春あめや名ぬれふ山の雪よき

吟して来るる〜

龍を〜と〜やうき世の猿掛

吟して来るる〜 ちやぬるるも  
このほろぬるる

里山木の国を〜と〜やうき

是向いのけもよき〜と〜  
ちやぬるる

腰のや 葉の籠りやさささ〜と〜

腰のやよく流るるふも〜と〜  
よのらまよかり〜と〜  
ちやぬるる〜と〜  
あはれ多く腰のやよ〜と〜  
後ろを味ひて〜と〜

行幸や親ふ白髪をかじり

年の瀬也鶴川不見〜と〜

の〜と〜と〜と〜と〜と〜

や〜と〜と〜  
捨也〜と〜



あはれなるやゆき 雪のふりゆく  
あはれなるやゆき 雪のふりゆく  
あはれなるやゆき 雪のふりゆく  
あはれなるやゆき 雪のふりゆく  
あはれなるやゆき 雪のふりゆく

雨の降るよとほそこのとみへは  
雨の降るよとほそこのとみへは

夢のまのちのまのちのまのち  
夢のまのちのまのちのまのち

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく  
あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

あはれなるやゆき 雪のふりゆく

Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header, written in a cursive script.

Handwritten text below the title, possibly a subtitle or a specific section heading.

Main body of handwritten text on the top page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text at the top of the bottom page, possibly a title or header.

Handwritten text below the title on the bottom page.

Handwritten text on the bottom page, continuing the main body of text.

Handwritten text on the bottom page, continuing the main body of text.

Handwritten text on the bottom page, continuing the main body of text.

Handwritten text on the bottom page, continuing the main body of text.

Handwritten text on the bottom page, continuing the main body of text.

Handwritten text at the bottom of the page, possibly a footer or a concluding note.

とよりくちかたぬる  
 初葉もあまのつむ輪もせん  
 君火ききすれみの見せんをたぬ  
 おれあやむ鼻息も一面の内  
 鳴らぬえんおれやかくれん  
 これあのみあひあまのこころか  
 道を歩ゆゆきをききぬ  
 まあまのこころをよむ自地のこころ  
 了規未のこころをけのこころ  
 おれあやむ  
 拙堂田負外をよむあまのこころ  
 あまのこころをよむあまのこころ

少古人のうき紙解とる不階梯  
 ちるあまのこころをよむあまのこころ  
 了規未のこころをけのこころ

俳諧寂琴負外 大尾

...

...



韻鏡錄榮實收

*Stenographer*  
*the name of the*  
*the name of the*

江都書林

下谷御成道

青雲堂英文藏板

小學本註 二冊 增補文語碎金 二冊 八面鋒 四冊

扶桑蒙求 三冊 宋名家詩選 二冊 晚唐百家絕句 五冊

題画詩類鈔 二冊 香奩集 一冊 和歌題百絕 一冊

三大家絕句 一冊 蜀山先生詩集 一冊 東征稿  
西上記 二冊

漫遊文章 五冊 昔々春秋 一冊 酒中趣 二冊

左傳凡例考 一冊 左傳比事 一冊 歲華一枝 一冊

歲華一枝拾遺 一冊 名乘字引 一冊 名乘字彙 一冊

略註五經字引 一冊 篆書字引 一冊 易學小笈 一冊

書家必用 一冊 書家錦囊 一冊 書家便覽 一冊

古韻通叶 一折 醫書之部

治痘論 一冊 治痘要論

治痘要方補遺 一冊 痘疹戒草 三冊 痘疹卷 一冊

痘瘡食物考 一折 治痘要訣 一冊 續痘科辨要 三冊

種痘辨義 一冊 保嬰須知 二冊 方函 二冊

日養食鑑 一冊 雜書之部

翁問荅 四冊 三省錄 五冊

世事百談 四冊 瓦礫雜考 二冊 東江小倉百首 一冊

子昂真草十字文 子昂龍興寺碑 隸書醉翁亭記

蘭竹画譜 二冊 竹沙小品 一帖 光琳百圖 二冊

光琳百圖 後編 二冊 画圖撰要 三冊 一蝶画譜 三冊

蕙齋略画 二冊 刀劔圖考 一冊 刀劔圖考 二篇 一冊

裝劔備考 一冊 鞍鐙圖式 一冊 甲冑着用辨 二冊

貞丈家訓 一冊 田畑調法記 三冊 百姓袋 一冊

校正孔方圖鑑 一冊 珍錢奇品圖錄 一冊 古錢鑑 一冊

佛鬼軍 一休 一冊 三畏一心記 一冊 日蓮御一代記 一冊

善惡種時和讚 八部秘講釋 一冊 曆日講釋 一冊

歌書之部

貫之集類題 二冊 香川景樹集 桂の落葉 二冊 海軍家集 柳園家集

千町拔穂 一冊 園圃拔菜 二冊 萬葉用字拾 一冊

靈能一貫 二冊 源氏物語系圖 一折 手柄岡持狂 二冊

蜀山百首 一冊 仮名類纂 一冊 竹村茂枝集 一冊

俳諧之部 續故人五百題 二冊 掌中故人五百題 一冊 新五百題 二冊

新五百題 二冊 嘉永五百題 二冊 今人五百題 三篇 四冊

近世五百題 二冊 白碓坊五百題 二冊 過日庵撰 今人百家類題 二冊

過日庵撰 近世十家類題 二冊 名所千題集 三冊 題林發句集 四冊

十萬發句集 四冊 乙二發句集 二冊 曉臺七部集 二冊

發句古今撰 二冊 過日庵輯 蒼虬翁句集 二冊 今人發句集 二冊

俳諧寂琴 二冊 饒舌錄 二冊 過日庵撰 名家類題 四冊

一葉集 芭蕉翁 一代集 五冊 一葉集 後篇 翁之文消息 四冊 俳諧集草 十六冊

俳諧四季草 四冊 安政五百題 二冊 過日庵撰 類題金玉集 四冊

風俗文選拾遺 二冊 庭訓往來 一冊 風月往來 一冊

梅澤先生手本向 庭訓往來 一冊 消息詞 一冊 庭梅帖 一冊

千字文 一冊 女今川 一冊 女雅俗要文 一冊

御成敗式目 一冊 雪後帖 石摺 一帖 新撰詩歌合 一冊

新三十六歌仙 一帖 實語教童子教 一冊

續撰朗詠集 二冊

諸流手本向 一帖

同真名序 一帖 尊朝瀟湘八景 一冊 大槁庭訓往來 一冊

|                                    |                                 |                                  |
|------------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| 大橋新年帖 一冊                           | 橘正敬庭訓 一冊                        | 正敬商賈往來 一冊                        |
| 蓮池堂法帖 一帖                           | 瀧本芳野道の記 一冊                      | 瀧本鴻書帖 一冊                         |
| 雜書并繪人物之部                           | 實語文選 一冊                         |                                  |
| <small>十返舎一九案文</small><br>諸國書狀指 一冊 | 教訓圖會 前後 二冊                      | 皇朝三字經 一冊                         |
| 繪本國恩俚談 一冊                          | 大學笑句 一冊                         | 裁縫早手引 一冊                         |
| 米錢胸算用 一冊                           | 每朝神拜小言 一折                       | <small>式亭三馬作</small><br>小野馬鹿村 一冊 |
| <small>十返舎一九作</small><br>附會案文 一冊   | <small>山東京傳作</small><br>滑稽文選 一冊 | 安見道中記 一冊                         |
| 唐土名所の繪 一枚                          | 甲越勇士鑑 前後 二冊                     | 諸職雛形 一冊                          |
| 花鶴百人一首 一冊                          | 女大學至文庫 一冊                       | 女庭訓往來 一冊                         |



天下 方

登龍丸

食物一切  
七粒入  
壹粒入

壹粒入  
包代百文  
七粒入  
代六百五十文

此丸は天下の第一の妙薬也。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。

凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。

凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。

凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。

凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。凡そ病に罹る者は、此丸を服すれば、必ず病を癒す。其の効力は、神速無比なり。

此の書は... 御書物所... 江戸下谷御成道... 青雲堂... 英文藏製... 御用... 大助... 美大... 御書物所... 江戸下谷御成道... 青雲堂... 英文藏製... 御用... 大助... 美大...

東叡山 御書物所

江戸下谷御成道

青雲堂

英文藏製



御用 大助 美大 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂 英文藏製 御用 大助 美大 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂 英文藏製



